Title	新しい行為論の構想：ドイツ学会動向
Sub Title	Toward a new theory of action : a research trend in Germany
Author	鳥越, 信吾(Torigoe, Shingo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.99- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ビューポイント
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新しい行為論の構想

——ドイツ学会動向——

Toward a New Theory of Action: A Research Trend in Germany

鳥越 信吾

1. WSの問題意識

森川剛光 (デュイスブルク・エッセン大学) とクリスチャン・ドリース (フライブルク大学) が主催した行為論についてのワークショップ「行為=制作? ポスト制作パラダイムへの道」(以下、WS) が、2018年2月2、3日にデュイスブルク・エッセン大学にて開催された(ただしドリースは当日体調不良のため欠席だった)。両日とも15から20名の参加者により活発な議論が交わされた。若手の社会学者と哲学者が中心のWSであったが、報告者の中には今日のドイツにおける哲学的人間学を代表する論者の一人であるヨアヒム・フィッシャーなどのベテランや、演劇社会学のデニス・ヘンツィもいた。また当日の参加者の中には、合理的選択理論のハルトムート・エッサーの姿もあった。

このWSの問題意識は、森川の基調講演によると、既存の行為論が「制作(*poiesis*, *Herstellen*)」を前提として形成されているところにある。すなわち、行為とは「目標」や「意図」ないし「規範」や「価値」に方向づけられた行動を意味し、行為者とはそれらを、最も適切な手段を主観的に比較衡量したうえで現実化しようとする人間だということ。そしてその場合、行為の「意味」とは、実現されるべき目標と同一視されるものであり、行為の合理性は、行為目標を実現するために選択された手段をとおして再構成されうるものでなければならないこと——こうした想定のもとに行為を捉える思考様式が、既存の行為論に現勢的であった。本WSではこうした想定を「制作」パラダイムと呼び、この想定を脱した「ポスト制作」パラダイムの行為論の可能性が探究された。

それでは制作パラダイムの不十分さはどこにあるのだろうか。このパラダイムにおいてはまず第一に、上述の意味での行為を行うことができない人や、あるいはモノは、社会的世界から排除される。さらに第二に、制作パラダイムは、以下3つの概念的な困難を伴っている。①人間の活動は、「制作」で汲み尽くされるわけではなく、また行為の意味は行為の意図や規範に還元しきれものではないこと。②後述するが、線形時間の上に展開する因果連関を想定する制作パラダイムでは、未来は過去の結果以外ではありえない。したがって制作パラダイムでは、現在の創発性や新奇性の問題を考えることができないこと。③このパラダイムは——後述するようにアレントの意味での——人間の唯一性および複数性を正当に取り扱えないこと。こうした問題意識から、ポスト制作パラダイムは構想されている (cf. Morikawa 2017b)。

鳥越信吾「ビューポイント：新しい行為論の構想——ドイツ学会動向——」
『三田社会学』第23号(2018年7月)99-103頁

この構想を実現するためには、どのような視座に立つ必要があるのか。主催者たちによると、プラトン・アリストテレス以来の「制作」と「実践」との区別にまで遡及した上で、後者の観点から行為について探究しなければならない。そのための導きの糸は、マルティン・ハイデガーおよびハンナ・アーレントによる「制作」批判にある。

ハイデガーは、ヨーロッパ思想の伝統がその中で育まれてきたプラトン・アリストテレスの存在論の問題構制を、次の点から批判している。そこでは、存在とはまずもって「制作されて在るもの (Hergestellt-Sein)」であると考えられていること、また時間とは連続する線形的な時間だということが前提とされていること、これである (Heidegger 1927=2013: 25, 35)。ここから森川は基調講演で、制作としての行為と線形時間とのあいだの緊密な結びつきを指摘する。すなわちハイデガーが「存在」と「時間」に関して行った批判が、「制作行為と線形時間」批判として位置づけられ、ポスト制作パラダイムの探究の起点に置かれるのである。

また、アーレントは、労働 (Arbeiten)、制作 (Herstellen)、そして行為 (Handeln) を人間の「活動的生 (vita activa)」の3つの形式として区別している。これらのうち、前二者が対モノの活動であるのに対して、後者の行為は人間間の「複数性という厳然たる事実」に対応し、「物質、素材、人工物といった媒介によらずに」 (Arendt 1960=2015: 12) なされるものとして位置づけられる。彼女がこれらの活動諸形式を区別するもっとも深い理由の一つは、アリストテレスが——行為と制作の区別を強調しているにもかかわらず——「行為」であるはずの事象を「制作」において理解してしまっていることにある (Arendt 1960=2015: 251ff.)。WS 主催者らは、このアーレントの試みを、アリストテレス以来の「制作」と「行為」(ないし「実践 (Praxis)») の区別を厳密化したうえで後者の立場から人間活動を捉え直そうとしたものとして位置づけ、ポスト制作パラダイムの探究の起点に置いている¹⁾。このように本 WS は、ハイデガーおよびアーレントの「制作」批判に基礎づけられ方向づけられている (Morikawa 2017a)。

2. WS の概要

報告者と報告タイトルは以下のとおりである。

- 1 到達可能性の以前性——ハイデガーによる行為と制作のメディア哲学的再概念化
アンドレアス・バインシュタイナー (インスブルック大学)
- 2 良い制作は存在するか——ハイデガーによる透明な技術への道
ルーカス・ラートイェン (チューリッヒ大学)
- 3 潜在性の専制
デニス・ヘンツィ (ダルムシュタット大学)
- 4 思慮と実践の形式
エマニュエル・ザイツ (フランクフルト大学)
- 5 受動的生 (Vita passiva) ——非制作的・非行動主義 (能動主義) 的な社会的世界の現象

ヨアヒム・フィッシャー（ドレスデン大学）

6 熟慮と行為（Aktion）の彼岸——ポスト・プロテスタント的行為理論の諸要素

ユリアン・ミュラー（ミュンヘン大学）

7 実行された現実としての行為

グレゴール・ボンゲルツ（デュイスブルク・エッセン大学）

8 相互行為の中で生じる行為、目的を欠いた遊戯としての行為——ポスト制作的行為論のための諸選択肢

マルティン・ヴァイヒョルト（レーゲンスブルク大学）

9 停止と相互受動性——ポスト制作的な行為および相互行為の概念

ロベルト・ザイファート（デュイスブルク・エッセン大学）

10 ポスト専制的主体性のイントラアクティブな生成について——ポスト制作的社会学のためのバトラー、バラト、ハラウェイの批判的読解

ジュニファー・アイケルマン（ドルトムント大学）

11 修道院の規則について——ウェーバー、ウィトゲンシュタイン、アガンベンの接続に関する考察

ペーター・アイゼンベック（ミュンスター大学）

12 創出（Erfinden）——ジャック・デリダにおける可能なものと不可能なものとのあいだでの「するということ」（Tun）

ダーヴィット・イエッケル（ハーゲン大学）

紙幅の関係からすべての報告に個別に言及することはできないため、ここではこれらの報告から、制作パラダイムに対してどのような批判がなされ、ポスト制作パラダイムの構想のためにどのような論点が提示されたのかを追っていくことにしたい。

WS で言及された制作パラダイムの特徴として、次のものが挙げられる。すなわち既存の行為論において想定されているのは、行為とは、①能動的な人間の行為者によって、②あらかじめ保持された「目標」や「規範」、ないし「企図（Entwurf）」に方向づけられてなされるものということ、③行為の「意味」とは、行為によって実現されるべき目的と同一視されるものであること、④行為は身体運動をとおして実現されるものということ、⑤このように実現された行為の結果は、当該行為が外的世界に及ぼした変化、したがってその行為の「制作物」だということ、⑥この制作物と制作するものとしての行為は、因果連関によって結ばれていること、⑦そうした因果連関は、線形時間の上に展開されるものということ、これである。もちろんこれらの論点は、すでに様々な行為論において（たとえばホモ・エコノミクスやホモ・ソシオロジクス批判の中で）批判的に検討されているものではある。ただしそうした批判は、このWSの観点からすれば部分的なものにすぎない。これに対して本WSの意図は、繰り返しになるがこのような行為の考え方がそこから出てくるパラダイムそれ自体を問いに付すことにあ

る。

本 WS の各報告では、ポスト制作パラダイムにおける行為論が考慮しなければならない論点として、次のものが挙げられた。①「目的」に方向づけられていない行為、たとえば遊びや感情的行為など。②身体運動を介した外的世界への働きかけを伴わない行為、たとえば「停止 (Suspension)」や「待機 (Warten)」。③「受動性」の領域、たとえば非意図的な模倣。受動性の問題は、なぜ行為論が主体を指示する時に用いる語は *aktiv* に由来する *Akteur* であって、*passiv* に由来する "Passeur" ではないのかといった根本的な問題提起を含め、幅広く論じられた。④自律性を欠いた「弱い主体」。⑤非線形的で非因果的な時間。⑥予期不可能な未来と、想起不可能な過去。

この WS は、人間中心主義批判を一つの柱とするアクター・ネットワーク理論や思弁的实在論の今日における隆盛と共鳴するように筆者には感じられた (現に WS の中ではしばしば、これに関わる論者の名前が挙げられていた)。そうであれば本 WS は、新しい社会学の行為論の構想にとどまらず、隣接諸学の動向とリンクしたより広い射程をもつものであると位置づけることができる。

ただし本 WS では、時間の問題については断片的にしかふれられていなかった。このグループは今後、さらにカンファレンスを開催し、ゆくゆくは論文集を出版する予定であるとのことで、時間の問題はこれの中で議論されるそうである。今後の動向を楽しみにしたい。

【註】

1) ブルデューの流れを汲む実践理論に依拠している論者も、この WS には大勢参加していた。たとえば第七報告者のボンゲルツや第九報告者のザイファートがそうである。ブルデューと制作パラダイムとの関係については (Morikawa 2010) を参照。

【文献】

- Arendt, H. 1960, *Vita activa: oder Vom tätigen Leben*, Kohlhammer. = 2015, 森一郎訳『活動的生』みすず書房。
- Heidegger, M. 1927, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. = 2013, 高田珠樹訳『存在と時間』作品社。
- Morikawa, T. 2010, "Platonic Bias in der Sozialtheorie: Über den Begriff des Handelns bei Hannah Arendt und eine philosophische Kritik an der soziologischen Praxistheorie." *Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie*, 96(4): 498-515.
- , 2017a, *Wissen und Konstruktion des Anderen: Beiträge zum post-poietischen und postkolonialen Paradigma*, zweite, erweiterte und veränderte Aufl, Kassel university press.
- , 2017b, "Handeln = Herstellen? Unterwegs zu einem postpoiетischen Paradigma (CfP)," (Retrieved January 30, 2018, www.hsozkult.de/event/id/termine-34475)

ビューポイント

(とりごえ しんご 慶應義塾大学訪問研究員)